

清水 正の

# 一里一尺

～自然をたずねて～ ⑫

身近な里山の秋

～多様な地形に多様な植物～  
ひつつきむしたちの世界

として朱雀  
大路建設の  
目印にされ  
たという  
いわれのあ  
る山です。

古くは神南備山とも呼ばれ、「神の  
隠れる場所」として信仰の対象で  
した。一休寺から薪神社に至り、  
真っ直ぐ進むとメインルートに続  
く登山道、別に途中で右に曲がり  
く登山道、別に途中で右に曲がり

川沿いに行き、田んぼを抜けて山  
に入る登山道があります。いずれ

も途中からいくつも分岐するルー  
トがありバリエーションに富みま  
す。初めて来たときはメインルー  
トをとり植栽が多く階段の多い、

草木の観察にはいまいちの所でし  
た。この山は京田辺市発行甘南備  
山登山マップによると「延暦一三

年（七九四年）、桓武天皇による平  
安京造営に際して、京都の中軸線  
の場所もありましたので、そこへ

## 新ルート発見で楽しい山歩き

今回はそのルートを歩きました。

京田辺市の南西部にある独立峰  
甘南備山（二二一m）に登りました。  
この山は京田辺市発行甘南備  
山登山マップによると「延暦一三  
年（七九四年）、桓武天皇による平  
安京造営に際して、京都の中軸線  
の実のような形の黄色の花をつけ

## 秋の始まり

山の麓に田んぼが広がります。稻  
はもう頭を垂れています。畦には  
アカマンマ（イヌタデ）、ミズソバ、  
アキノウナギツカミ、ハナタデ、  
サクラタデなどのタデ科の草が広  
がっています。反対の山側には貝



ミズソバ



サクラタデ

たノアズキ(ヒメクズ)、ヤブマメ、  
アレチヌスピトハギなどのマメ科  
植物が彩ります。マメ科とタデ科。

いよいよ秋の始まりです。先に進



ノアズキ(ヒメクズ)



アキノウナギツカミ

むと小川 沿いの道  
湿地状に で、水が  
なつてき 渗み出す  
ました。 ます。  
ここから はツリフ  
ネソウの 群落が始  
まります。  
少し前は 希少種も  
ありまし たが、す  
でに草刈

りされていました。

## 昆虫と植物の微妙な関係

### ツリフネソウ

入り口か

ら、突き

出た下唇

離発着場

のように

降り立つ

て密のた

まつた距

へと進みます。その時、上の花弁

から突き出た雄しべがマルハナバ

チの背中をこすり、花粉をつける

とともに雌しべに他花の花粉をつ

けていくというしくみになつてい

ます。マルハナバチは同じ種の花

に行き来する率が高く受粉効率が

よいといわれています。多くのツ

リフネソウを訪れたマルハナバチ

粉を運んでくるマルハナバチの類

にぴったりのサイズになつていま

す。マルハナバチたちは花の正面

植物の側から見ると前に突き出し



ツリフネソウ

た花弁をよく見ると、すごく傷が付いたものがあります。これは沢山のマルハナバチが訪れた時に引つかれたもので、受粉が完了したことがわかります。しかし、いつも上手くいくわけではありません。クマバチは身体が大きく、花に潜り込むことが出来ません。そこで彼らは距の外側に穴を開け蜜を採ります。またホシホウジャクという蛾は花の前でホバリングしながら長い口吻を花に差し込み蜜を吸います。いずれもツリフネソウにとつては無錢飲食の困ったお客様になります。全てが上手く行く事はないのが世の常といった感じで、虫と花の関係もなかなか面白いですね。ツリフネソウ属の学名は *Impatiens* (もう我慢できない)、その名の通り成熟した果実に触れたり揺れた

りすると、突然のように中の種子が飛び出します。飛距離は数メートルにもなることがわかつています。動物による種子散布のよう遠くには行かないですが、一年草のツリフネソウにとつては、親が育つた近くの場所こそが確実に大きくなる安全な場所であり、子孫繁栄が約束されるという戦略なのでしょうか。

### ひつつきむしアラカルト

小川を渡り山道に入ると、実をつけたウドが斜面の下に沢山見られ、道沿いには在来のヌスピトハギやイノコヅチ、ササグサ、チジミザサなどが花や実をつけだしています。これらはどれもひつつき虫(くつつき虫)と呼ばれる類で、動物の身体について種子を移動させ、遠くに種子を散布するという

移動出来ない植物が分布域を広げるしくみです。私たち人間とて動物ですから除外はされません。この時期の野山歩きには致し方がないのですが、ズボンの裾に付いたひつつきむしは厄介なものです。しかし植物にとつては人間に運ばれた種子の多くはバス待ち時間などにズボンから外されアスファルト道路に捨てられ、子孫の芽ばえる機会が少なく迷惑な運び屋です。山道に入る前の田畠周辺ではアレチヌスピトハギ(外来種)が多く、山に入るに従つてヌスピトハギ(在来種)に変わるのは、きっと人の出入りの違いなのでしょうね。この二つとも似ているようですが、実の付く時期に見るとすぐ違がわかります。アレチヌスピトハギは豆が三から六連なっています。ヌスピトハギは二連で

茶色の班を持っています。名前の由来としては諸説有りますが、スピトハギの豆果の形が盜人の足跡に似ているからと言うものが有力です。とすれば在来はコソ泥で、豆果が六つもあるアレチヌスピトハギは盜人集団（ギャング）といふことでしょう。さすが北米からやつて来ただけはあると、一人笑つている私です。しかしそんなことに悦に入っているのもいいですが、しつかり花を見てやつてくれたものといわれています。

ださい、小さいながらも萩のような蝶型花冠をして愛らしいではありませんか。この植物はなかなかの知恵者で、豆果の表面は毛に覆われ、先が鉤状になつています。

この鉤で衣服にひつついてなかなかとれないのですね。でもこれに似たものが人工であります。皆さんが普段の生活でお世話になることが多いマジックテープです。

ひつつきむしの構造を元に考案されたものといわれています。自然

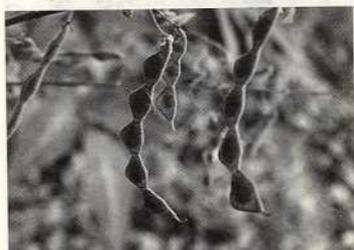
界のものからヒントを得て沢山のものが作られています。そう思うと自然ですごいといわざるを得ませんね。



チジミザサ



ヌスピトハギの実



アレチヌスピトハギの実

秋も深まるとともに、ひつつきむしは町の中にも野山にも沢山見られるようになります。沢山の子どもたちを連れて河原に行つたりすると、採つてきたヌスピトハギ（他のものでもかまわない）を縦、横、斜めに並べて服の上に文字のようにはり付けると名札に早変わりします。子どもは面白くなつて互いにひつつけ合つて賑やかに遊び出します。「他にひつつくものはないかな」といういろいろなひつつきむしを探してくれます。センドンゲサ、コセンドンゲサ、アメリカセンダンゲサ。オオオナモミを発見すれば即席ダーツ（堅いフック型）。チカラシバがズボン

の裾に刺さります。前述した山道にもササグサやチジミザサが生えています。ハイカーを悩ませます。ひときわ厄介なのがチジミザサです。これは麦の実の先が長く尖っています。それを想像してもらえばわかると思いますが、芒といつてイネ科の植物によく見られる細く尖った刺のようなものが実についていてひついてきます。おまけにその芒には粘液が付いていてネチャネチャとくっつくのです（刺と粘液型）。ダブルで来るから採るのが大変。センダンングサの類は種の先が尖っていますが、抜けないように返しをつけています（逆さ刺型）。ヌスピトハギのなまは柔らかいフック型です。ひつき虫の観察にはルーペが必携です。皆さんも童心に帰って、秋の一日をひつきむしで遊んでみては如何でしょ

うか。ひつつきむしオタクになるための便利な図鑑があります。「ひつつきむし図鑑」監修北川尚史／写真伊藤ふくお／文丸山健一郎（トンボ出版）

秋澆嘆

「ひつつきむし図鑑」監修北川尚史／写真伊藤ふくお／文丸山健一郎（トンボ出版）

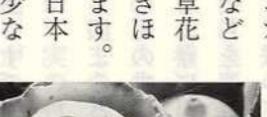
## 秋満喫

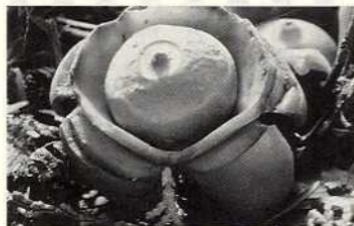
もう少し奥へと進んでみましょう。植林地に入りそこここにきのこが見つかります。キクバナイグチなどのイグチ類、クサイロハツチチタケなどベニタケ類、ヒナツチガキ、エリマキツチグリ、ノウタケ、カニノツメかと思われるきのこなどの腹菌類、ナラタケモドキなど多種多様なきのこが見られます。中でも腹菌類は色形とも変化に富んで名前がわからずともファンタジーな世界を楽しませてもらいます。間もなく頂上です。

ここで山城や生駒の山などを見

見てから扇池へと向かいます。今までの景色とは一変して、池畔には草地が広がり、池畔のウメモドキ、イソノキ、ワレモコウ。斜面に広がるアキノタ、ムラソウ、ツリガネニンジン、ヒヨドリ、バナ、サワヒヨドリ、コガンビなど、秋の草花が咲きほこります。

今日本のでは少なくなつた風景です。



## エリマキツチグリ



## ツリガネニンジン